



12月某日、吾輩までも猫仲間を差し置いて、人間の J.H.さんと「メトロポリタン美術館展」へ行ってまいりました。何故人間と一緒にかという、吾輩は小さいので展示物まで背が届かない上に人間の足元で踏まれたら大変...というわけで、少々座り心地が悪いものの J.H.さんの肩を観覧席にしました。しかし今回は相棒が「昨日食べたコテキーノの胃の中の脂を消費するために行くわ」(まだクリスマスではないのに食べた)程度の人間なので、新感覚ならぬ珍感覚レポートになると思います。

さて、この展覧会の呼び物は右のチケットにある通り、日本初公開のゴッホの『糸杉』です。今回の展覧会でのタイトルは『糸杉』とありますが、日本では一般に『二本の糸杉』と呼ばれるものです。というのもフランス南部のサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスでゴッホは他にも糸杉を描いています。ゴッホは太陽に向かってうねるように勢いよく伸びる糸杉が大好きだということを、弟テオ宛の手紙に書いています。そしてこの糸杉ですが「哀悼」という花言葉を持つように、本来は墓地に植えられることの多い木でした。ゴッホもそのことはよく承知していました。

自然をモチーフにした絵画、造形物、タペストリーなどにご興味のある方はどうぞお出かけ下さい。上野の「東京都美術館」で2013年1月4日までです。



勝手にピックアップ

●● レンブラント・ファン・レイン《フローラ》

真珠のイヤリングとネックレスは夫から妻へのプレゼント。それをつけた亡き妻の面影を春の女神に重ねました。光と影の巨匠：レンブラントの「妻への賛美と愛情」が思いっきり込められた作品です。

●● ポール・ゴーガン《水浴するタヒチの女たち》

ピエール・オーギュスト・ルノワール《浜辺の人物》

力強いタッチのゴーガンとソフトな印象のルノワール。この対照的手法作品が隣り合わせで展示されていました。地球上の同じ「海」でありながら場所によって違う「海」それぞれのテーマの中にある女性の生活の対比。一目で彼らの作品と判る個性が際立ちながらも違和感なく融合して並んでいます。

●● エドワード・ホッパー《トゥーライツの灯台》

抜けるような青空と天使の羽のような白い雲の中の生活感。アメリカ的郷愁を感じさせる風景です。

●● ルイス・カムフォート・ティファニー《ハイビスカスとオウムの窓》

宝飾で有名なティファニー家の子息でアメリカを代表するアール・ヌーヴォー工芸家のステンドグラス作品。教会にしかなかったステンドグラスを家庭の窓にも取り入れました。乳白色の薄いガラスを重ねて作られたハイビスカスの花びらが独特な深みを演出します。

●● 《音楽を奏でる男女の羊飼いのタペストリー》 《花のアップリケのキルト》

自然の風景の中に歌詞が織り込まれていたタペストリー。細やかな女性の優しさを感じるキルト。

★プトレマイオス朝の《猫の小像》は吾輩と J.H.の大のお気に入り。当時の動物は人間と同じように尊重されていて、中でも猫はほとんど崇拜の域に達していました。耳にピアスの跡がある小像は実は猫のミイラを入れる棺でした。また不死の象徴である《ライオンの頭の兜》は一際輝きを放っていました。

★ECO 提唱前から太陽光発電のソーラーシステム人間 J.H.は糸杉が大好き。ゴッホの『糸杉』に「実」が描かれていることを確認しました。けれど糸杉よりも他の絵に描かれた「桜花」と「桃の木」の美しさにハッとさせられました。また子供の頃からアマガエルの黄緑色が大好きで、親戚宅近隣の寺で「危ないから池に近づかないように！」という和尚の怒号をかいくぐって蛙の生態を観察した J.H.は《カエルの分銅》に直面してニッコリ。吾輩も唯一にらめっこをして負けたガマガエルを思い出しました。

★本展音声ガイドにはメンデルスゾーンの古楽器によるピアノ三重奏曲、イタリア、ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏、フランス宮廷人たちの牧歌趣味の音楽が使われている他、坂本龍一さんが本展のために作曲したオリジナルイメージ曲もありました。美術展では音声ガイドを借りて1時間半かけて鑑賞する J.H.は、またしてもヨーロッパ古楽の世界へ。因みに今までの美術展で聴いた珍しい B.G.M.は「高野山のお経」でした。最近の美術展（空間芸術）には音楽（時間芸術）がうまく融合するニヤ〜。(2012.12.19)